ケースリポート　インスリンポンプ無線通信機能搭載血糖測定器の導入

ICTで患者と事前にデータ共有 医療者が分析し患者指導に活用

JR八王子駅北口から徒歩1分。山本直之院長が大学病院の糖尿病専門外来で培った経験に基づく診療を、糖尿病療養指導士（看護師）や管理栄養士とのチーム医療で提供する。その特長の1つがインスリンポンプ外来導入だ。ポンプへの無線通信機能を搭載した血糖自己測定器コントアネクスト®Link2.4（販売元：日本メドトロニック株式会社、製造販売元：PHC株式会社）も発売直後から導入している。ICT活用による1型糖尿病診療の質の向上について、山本氏に伺った。　（編集部）

八王子糖尿病内科クリニック（東京都八王子市）
院長 **山本直之**氏　やまもと・なおゆき

八王子糖尿病内科クリニックの概要

2016年6月開院。体制：医師2人、看護師3人（うちCDE 1人）、管理栄養士3人、事務4人　糖尿病患者数：外来／1200人／月（延べ人数、うち1型糖尿病患者100人、インスリンポンプ使用者6人）

インスリンポンプの外来導入に注力 疾患理解や操作などを丁寧に説明

山本氏が現在診ている糖尿病患者は約1200人。うち約100人が1型糖尿病で、10～40代の5人がインスリンポンプ メドトロニック ミニメド600シリーズを使用しており、全員がコントアネクスト®Link2.4を導入している。

「インスリンポンプの導入はほとんどの医療機関が入院で行っているのが現状です。しかし社会情勢の変化などで以前よりも入院に対する心理的ハードルが上がっていることに加え、症状もないのに入院となると躊躇する患者さんがとても多いです。そこで当院ではそのような状況に対応すべく、インスリンポンプの外来導入に注力しています」

もちろん低血糖発作時などの入院可能な医療機関として、出身の東海大学付属八王子病院や東京医科大学八王子医療センターとも連携している。

インスリン自己注射を必須とする1型糖尿病では、自身の疾患や治療をより十分に理解することが望ましいという。さらにインスリンポンプは特定保守管理医療機器であるため、導入に際して患者には携帯でメールが打てるレベルの操作や、日常で携行するための服装の工夫、医療費の負担も求められる。

「そのような制限を考慮した上でも、導入した方がメリットがあると考えられる患者さんにポンプをお勧めし丁寧な説明を行います。自分の疾患を理解し血糖コントロールを良くしたいという気持ちで治療に取り組む患者さんは、メリットを感じて選んでくれます」

コントアネクスト®Link 2.4の特長は利便性・安全性・精確性・クラウド上での共有

コントアネクスト®Link 2.4は、発売直後の2017年秋から導入した。

「患者さんにお勧めした理由は、コントアの血糖測定結果をミニメドへ無線送信できることと、ミニメドへのボーラス注入指示が簡単なことです」

最初に導入した40代女性患者は「ものすごく楽！」と喜んだという。ポンプへの血糖データ無線送信は、入力ミス等のリスクや入力の手間を軽減する。

「ポンプを使う患者さんは1日3～4回の血糖測定が必要ですが、その多少の煩わしさの積み重ねが測定回数の減少につながります。テクノロジーによってそれを防ぎたいと思いました」

コントアネクスト®Link2.4の高い精確性は、米国・糖尿病技術協会からも認定されている（**囲み参照**）。

「コントアの測定値はSAPの値との乖離が少ないことも患者さんの安心につながっています」

山本氏は患者が受診時に持参するコントアネクスト®Link2.4からダウンロードした1カ月分のデータを時間・日・季節といったミクロ・マクロの視点で見て、低血糖・高血糖をチェックする。血糖値は日々の食事・運動といった生活習慣に左右されるが、加えて八王子市という土地柄、果物の収穫期である秋や、大学生では帰省時に上昇する患者が多いという。

「患者さんが血糖値を手帳に記入する作業は、自覚を持つことと振り返りができるのがメリットですが、正直面倒という声も多く聞かれます。今はスマホで血糖管理する時代でもあり、当院が近々導入するCareLink™ Personalを使えば、患者さんが自宅のパソコンからコントアネクスト®Link2.4を中継機としてポンプのデータをクラウド上に送り、月ごとの外来を待たずして患者

CLINIC magazine 2019年10月号　別刷

資料をご希望の方はこちらへ